

## 入選

### テーマ：医療と福祉、わたしの体験 「共有すること」

宮城県・常盤木学園高等学校1年 板橋 佑夏

「お母さん、もう長く生きられないかもしれない……」。病院から帰ってきた母が、そう言いました。

五年前から癌治療をしてきた母に、癌が脳に転移してしまったことがわかりました。母が病気になったとき、いつかはこんなことを言われる日が来るのだらうと覚悟をしていましたが、いざ現実になると、やはり簡単には受け入れられず、涙が止まりませんでした。

その日の夜、いつも前向きで明るくて、滅多に病気の苦しみを口にしない母が、私の前で病気の辛さ、死への恐怖を語りました。私は驚きとともに、今まで母がどれだけのことを一人で抱え込んできたのだらう、と申し訳ない気持ちになりました。

そのとき、私が前に人間関係で悩んでいたとき、母が、「話を聞くことで、佑夏の状態を直接変えられるわけじゃない。けれど、痛みを共有することで、気持ちを軽くすることはできるかもしれない」と言っていたことを思い出しました。それなら、今度は私が母の話の話を聞きつつ、共有しよう、母が私にしてくれたように、病気を治せるわけではないけれど、話を聞くことで母の気持ちを軽くすることはできるかもしれない、そう思いました。

しかし、病気を持っている人の話を聞くということは、たとえ相手が母であっても、そう簡単ではありませんでした。こちらが前向き過ぎてても駄目。だからといって暗く同情し過ぎてても駄目。思っていたよりもとても難しいものでした。そんなことを考えてしまうと、母にどんな言葉をかければ良いのか、どうするのが正しいのかわからなくなり、母が病気のことを口にしても、ただ頷くことしかできない自分がいまいました。

こんな自分が悔しい。ただ頷くことしかできない自分が憎い。そう思い詰めていたとき、ある記事を見つけました。「癌患者はただ家族が居て話を聞いてくれるだけでいい・精神面では今まで通り普通に接し、身体面で不自由なことがあったらサポートしてほしい、と思っている」というような内容でした。その記事を見て、私は心を動かされました。記事を書いた人によると、癌患者だからなんでも特別にしようとして患者自身が、「自分は病気なんだ」という気持ちを高めてしまうそうです。この話を聞いてから、私の考えは変わりました。他の家庭と同じように、普通に接しよう、と。

それからの私は、前までのように、いつも通り母に接しています。お互い辛いことがあったら、お互い話を聞き合います。薬の副作用で体調が優れないときは、家事を手伝います。母はまだ、私の知らない苦しみを背負っていると思います。その苦しみを、これから少しずつでも話を聞くことで共有し、母の心の支えになることができたら良いな、と思っています。

もし、あなたの家族・友人・知り合いなど、身近に病気の人がいたら、声をかけてみてください。話を聞くことで、きっと何かが変わるはず……。

私もこれから先も、母と家族と一緒に癌と闘っていききたいと思えます。